



POINT 1
態度

単元を通して追究意欲を高める学習課題の設定

主体的に学びに向かう子どもを育成するためには、子ども自身の中に生じる「疑問」と既存の「認識」とのズレをきっかけに、必然的に学習課題が立ち上がる過程を大切にしたい。教師が一方的に提示するのではなく、子どもたちの気付きや違和感から学習課題が自然に生み出される工夫をした実践例を紹介する。

1 提示する資料の一工夫

5 学年社会科「米づくりの盛んな地域—山形県庄内平野—」の学習においては、「農産物検査法」に基づく米の品質等級（今回は一等米）を資料として提示し、北海道、庄内平野、全国の各データを比較した。これにより、「なぜ庄内平野や北海道の米は高い評価を受けているのか」という疑問を引き出し、予想を立てる学習活動を設定した。

2 予想を基に視点を明確化

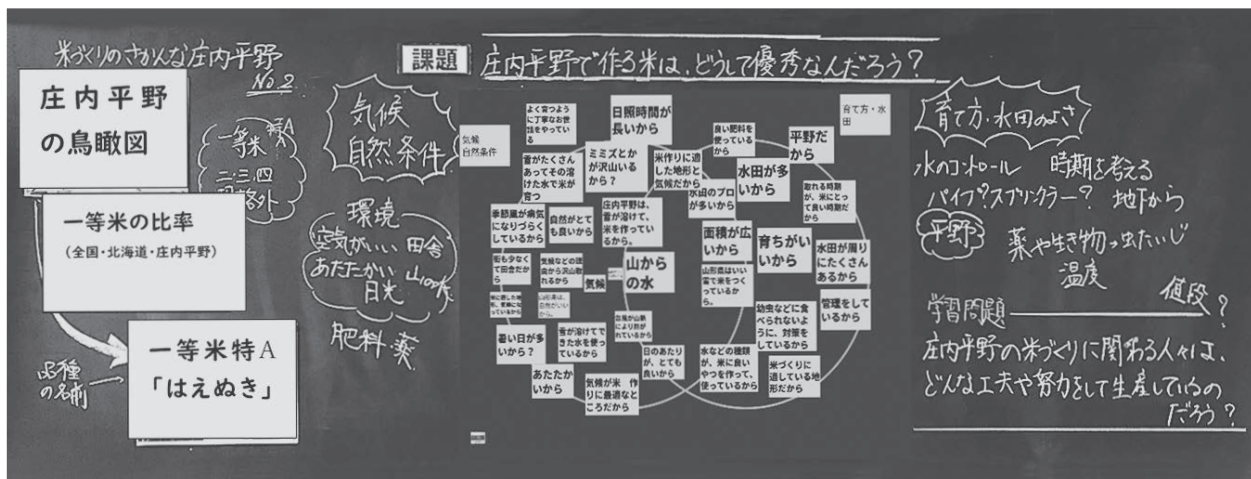
ロイロノートのシンキングツールを活用して

子どもたちの疑問や予想を可視化し、「気候・自然条件」と「育て方・水田のよさ」という視点に整理した。

その際、3・4 学年における地域学習の既習内容や日常の生活経験を想起しながら、十勝地方の畑作にまつわる知識と関連付けることで多様な予想を引き出すこともできた。

このように、視点を明確にして、考えや予想を構造的に整理する過程を経ることで、「庄内平野では、どのような工夫や努力によって米づくりが行われてきたのか」という学習課題を子どもたちと共につくることができた。子ども自身の問題意識に基づいた探究的な学びによって、単元を通して追究意識を高めることにつながっただろう。

以上のことから、子どもたちの「なぜ」という思いを大切にしながら学習課題を設定することによって、単元を通して子どもたちの主体的に学習に取り組む態度を一層育むことができるのではないだろうか。



【「米づくりの盛んな地域—山形県庄内平野—」の板書例（導入）】

子どもが実感をもてる授業づくり

豊頃町立豊頃小学校 教諭 近藤 正晃



小学校3学年

小学校5学年

中学校1学年

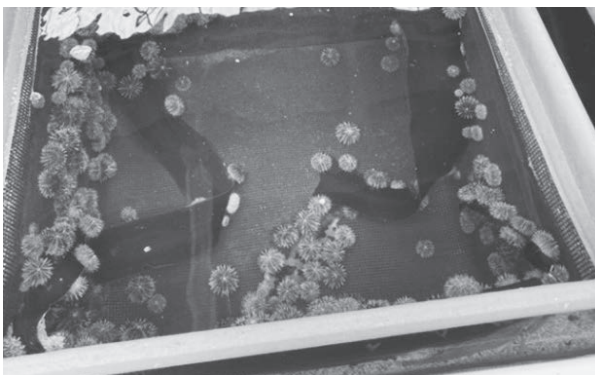
POINT 2

思・判・表

子どもが実社会とのつながりを感じるための教材の工夫

子どもたちの追究意欲を高める学習課題と並行して、それを支える適切な資料・教材を工夫することが必要となるだろう。その教材に触れた際、子どもがどのような興味・関心を抱き、どのような見方・考え方を働かせるのかを教師自身が具体的に思い描くことが、教材の価値を十分に引き出すことにつながると思われる。以下に、身近な地域を例にした教材を紹介する。

1 水産業の盛んな地域（広尾町を例にして）



【広尾漁業協同組合ウニ種苗育成施設の様子】

つくり育てる漁業の学習において、広尾町のウニ養殖業に関する資料を活用した。始めに、北海道における過去30年間のウニの漁獲量の推移に着目させることで、漁業資源が年々減少していることを読み取り、漁業の危機的状況について理解を深めた。その上で、自分だったらどんな対策を講じるかについて思考を促した。

次に、広尾町のウニ・コンブ漁の事例を取り上げた。ウニを育てるために、出荷できないコンブを餌として使うことにより、密接に関係していることを提示した。この学習を通して子どもたちは、水産資源は単独で維持できるも

のではなく、生態系や他産業との相互関係の中で成り立っていることに気付いた。加えて、このような取組が、持続可能な食料生産の実現につながるという視点を獲得することもできた。

以上のことから、漁業資源の現状理解にとどまらず、持続可能な漁業について多面的かつ総合的に考えることができたと言えるだろう。

2 災害被害を防ぐ取組（豊頃町を例にして）

教科書を活用し、津波災害における公的支援の具体例を学習した後、子どもたちにとって身近な地域（豊頃町大津地区）における東日本大震災の事例を取り上げた。学習内容を自分事として捉えることを通して、実際に震災が発生した場合の状況や対応を具体的に考える機会とした。さらに、震災後に津波対策として新たに整備された施設や仕組みについて理解を深める中で、災害と人々との関わりについて一層関心を高め、主体的に考えようとする姿が見られた。



【豊頃町大津漁港における東日本大震災の被害】

子どもたちにとって具体的かつ身近な事例は、多く存在する。教材を効果的に活用することで、学習内容の深い理解を促し、多面的に思考する力を高めることができるのではないだろうか。